

経済・産業・実務シリーズ

座 談 会

フェア・ディスクロージャー・ルールを機に考える アナリストと企業の「対話」について

と き 2018年2月23日（金）
ところ 日本証券アナリスト協会会議室

《出席者》（敬称略、五十音順）

井 垣 勉

（オムロン㈱ 執行役員 グローバル IR・コー
ポレートコミュニケーション本部長）

許 斐 潤 CMA

（日本証券アナリスト協会副会長
兼 野村證券㈱ 経営役 金融経済研究所長）

《司会》

北 川 哲 雄

（青山学院大学大学院 教授）

目 次

1. フェア・ディスクロージャー・ルールの評価
2. あるべきアナリスト像とは
3. アナリストと企業の「対話」とは

1. フェア・ディスクロージャー・ルールの評価

北川 2018年4月から施行されるフェア・ディスクロージャー・ルール（以下、FDルール）を主題として座談会を進めたいと思います。市場ではFDルールにつき様々な受け止め方があると聞いています。本来どのように受け止めるべきなのか、その上で企業のディスクロージャーはどうあ

るべきか。アナリスト側でいうと、アナリストはどのようなことを心がけて投資分析を進めるべきかについて、理想的アナリスト論まで含めて話を進めていければと思います。

まずアナリスト側の規制として16年9月に日本証券業協会（以下、日証協）の自主規制ルールができました。その点からご説明いただけますか。

許斐 まず第一に、ご指摘のように、日証協が「協会のアナリストによる発行体への取材等及び情